

メディアア時評



安立 清史

九州大学大学院教授
(共生社会学)

私たちは、なぜ新聞を読むの
だろう。新聞から何が読めるの
だろう。現代の若者は新聞を読
まなくなったようだ。新聞報道
が事実についての情報であるだ
けなら、ネットで十分だという
ことになる。しかし新聞の役割
はそれだけなのか。このことを
考えさせる記事があった。

毎日新聞夕刊は6月から「特
集ワイド」で「原発の呪縛 日
本よ！」と題したインタビュー
記事を掲載している。ここで論
じられていることは「原発再稼
働」や「脱原発」の是非といっ
た次元ではなく、「事実」を知
ることと「現実」を変えること
の困難さと、それを乗り越える
ための問題提起だと思ふ。

哲学者の内山節氏は、事実の
報道がいつのまにか情報操作に
なってしまう危険性と生き方の
転換の必要を述べた。滋賀県知
事の嘉田由紀子氏は、原発に近
く被害を受けやすい地域である
にもかかわらず再稼働に関して
意見も言えない状態におかれた
滋賀県民の苦しい立場を弁じ
た。物理学者の池内了氏は、国
民は原発なしの夏を生きる準備
ができていたのだと語る。社会
学者の大澤真幸氏は日本人の無
意識が原発を推進したことを論
じて、この悪夢を突き抜ける覚
醒の必要を説く。どれも内容の
濃い記事だった。

現実をより良く変えるため
に、私たちはできるだけたくさ
んの情報や知識を身につけるべ
きだと思ってきた。だが、原発
を止めると経済のみならず医療
や福祉が脅かされるかもしれない
等、何かを変えると別の問題
が現れることも分かってくる。
どうしたら良いのか分ならず、
この日本を根本的に変えること
は困難に思えてくる。

問題は原発に限らない。日本
をめぐるさまざまな課題は、ど
れも同じような形をして現れ
る。事実や現状が報道されるほ
ど、この現実を変えられないよ
うに思われる。しかし、現在見
えている事実や現実が絶対のも
のではない、角度を変えれば別
の世界や地平線が見えてくるは
ずだ。脱原発を宣言したドイツ
などはその一例だし、内山氏や
池内氏のように、別の生き方を
いちはやく実践する人も増えて
きた。現実には、常に変わって
いくのだ。だから新聞は事実を報
道するだけでなくこの「現実」
が形成される根元を掘りおこ
し、現在の現実とは別の可能性
や、その先にある何かを探り当
てていってほしい。

「現実」変える糸口の提示を

「特集ワイド」の記事はいつ
のまにか私たちを拘束しはじめ
る「現実」の姿の恐ろしさと、
それを乗り越えるヒントを示し
た。こうした記事を持続的に掲
載してほしい。若い世代が、そ
こから「現実」を変えるための
糸口を見つけられるような報道
やメッセージこそ、新聞の役割
なのではないか。まさに新聞に
とっても正念場なのだと思う。
(西部本社発行紙面を基に論評)